

大衆社会再考

高橋憲昭

現代社会の分析には一つの困難性がつきまとう。それは、そのシステムが極めて複雑化しているからであり、また、常にそれが変動しているからである。それにともなつて、分析原理も、単眼的なものよりは、複眼的なものが必要とし、さらに、常に再構成の必要性をはらんでいる。現に、研究者の間でも、現代社会の分析視角や原理は、必ずしも一致せず、そのとらえかたに大きい差異が存在する。この「現代社会」は、私の研究対象の一つでもあり、過去、幾編かの論考を發表してきたが、ここで重ねて考察を加えてみたい。

現代社会をみるばあいそれを大衆社会としてとらえる立場があるがその一応の整理は、すでにコーンハウザーによってなされている。また、現在は、すでに大衆社会ではないとする立場、すなわち、具体的には、脱工業化社会、情報化社会、とするみかたや、^①やや視点が異なるが、「大衆」に対して「分衆」、「小衆」の社会にはいつているとする考え方もある。他方、これに対する正反対の見解として、現在こそ、まさしく大衆社会そのものであり、その危機性を指摘する分析もある。^②

現在は大衆社会ではないとする立場は、社会はすでに消費やその他の面で、多様性、差異性を現わしており、各個人は、自己の主体性において、能動的に選択の自律性を獲得しているのであって、これは、画一性、受動性を特徴とし自律性を喪失している大

衆や大衆社会ではありえないとする考え方である。これに対して、現在は大衆社会だとみる見解は、個人の「自律性」についての解釈を異にしている。この立場における自律性とは、「人間として当然果たすべき規範（中核的価値）（超判断）を制度や他人の圧力に負けずに守りえているか否か」で判断されるものである。そしてこの自律性は、社会的外的構造（制度構造）、と内的構造（判断構造）の堅固さによって守られるが、現在の社会は、平等化と均質化の進展で、この外的、内的構造が衰えている社会であるとして、この中核的価値を守る構造が、無構造化した社会を大衆社会とみるのである。さらに、手段的能動主義によって支えられた産業化による「豊かさ」の達成は、手段的価値の重視から、即自的価値（コンサマトリーの価値）への転換を促進したが、これは手段的能動主義の衰えによる目的喪失からくる不安定性の生起と表裏をなしている。こうして社会は、不幸でないにせよ、不満やイラダチを蓄積し、慢性の病いに陥っている。そして、産業社会での人類の営みが今後に生かされるためには、大衆の一人一人がコンサマトリーな要求と手段合理的な必要との両者を認識し、その間の分裂に耐えるだけの強さを持たねばならないという。

このように、現在の時点における社会のとらえかたに对照的な二つの立場がある。しかし、よく考えてみると、両者とも現在の社会の特質の一面をとらえているのであって、ただ、そのちがいは解釈や強調点の相違からくるものであるといえる。たとえば、「分衆」化した社会とは、大衆が相互の鈍質と退屈と同一性に反逆しあい、分衆化して定型均一から逃走していく社会である。人々は、多くの可能性の中から自分の責任において自分の好みと方向性を選び出し、他人と異なる選択に生きようとするとき、大

いなる満足への期待の陰で、不安と疑問、反省と心配との漂流がある。人々は、階級という差異のシステムを放棄した社会において画一化の不気味さから逃れるために、ひたすら、感性や知性の差異を追い求めていくとする、この考え方は、現在を大衆社会とみる立場における自律性の解釈に大きい相違があるが、社会における非構造化という点では、現在を大衆社会とみる立場と共通の認識の上に立っている。すなわち、階級という差異のシステムを放棄した社会とは、とりもなおさず社会的制度的崩壊と、それによって守られるべき中核的価値の分解した社会を意味し、平等化と均質化の浸透を物語っているからである。

以上は、同時代としての現在をとらえる立場に、二つの対照的に異ったもの、があることを指摘し、その要点をのべたのであるが、さらに現在を単なる大衆社会とはみずに、高度大衆社会とよびその危機を強調する見解も存在する。それは、現在の社会は平衡が失われた社会である。平衡感覚というものは非常に激しい葛藤や緊張に囲まれていて、その中で、いかにして節度を守るかという際どいもので、これを守り抜く準備というものが精神的にも環境的にもなく、この感覚が溶解している。特に、現在の大衆社会を高度というのは、現代の大衆は、産業主義と民主制の成果である社会的平等を懐疑することなくひたすら享受し、やみくもに追求する。凡俗な人間が凡俗であることを知り乍ら、敢然と凡俗であることの権利を主張し、あらゆるところで押し通し、大衆の欲求と行動こそが守られるべき玉条となっている。ここでわれわれは、あらためて、大衆化によって犠牲にされたものは何かを尋ねねばならない。そして、平衡をとりもどすには、正しい意味での人間の矛盾と逆説に平衡を与えるものとして、伝統をとりもど

さねばならぬ。そのためには、何か「聖なるもの」とよんでいた種類のものが存在するはずであり、それをとりもどさねばならぬいというのである。この考え方も、現在を大衆社会とみる見解とその論理の枠を一にする。

以上の三つの見解のうち、現在を分衆の時代とみる立場がとる「自律性」の解釈は、単に自己の欲求の好みにおける選択であり、その達成にすぎない。真の自律性とは、やはり現在を大衆社会とみることの根拠となっていて、ところの自律性の解釈、すなわち、自己のコミットメントする中核的価値を守り抜くという強い意志に支えられた自律性でなくてはならないだろう。

たしかに現在の社会は、平等化、均質化とともに、内的、外的な非構造化の特徴を現わし抑制装置（宗教、伝統的制約、生存の脅威の減少）の弱化よりくる個人の欲求の無限の増大は、人間の平衡感覚と節度の喪失をもたらし、懐疑することを忘れさせる。また、他方において、欲求のコンサマトリー化がすゝむが、その反面、不満不安や、アノミーの状況を蔓延する一種の過渡的時期といえるであろう。かつて私は、現在の日本社会は、リースマンのパーソナリティーの三類型ではとらえることのできないパーソナリティー、具体的には、*自分は無力であるが、自分にしか頼れず、漠然とした不安をもつ* という意識に特徴づけられる新しい人間類型が現われつつあることを示唆した。そして、それは社会における基本的な共同の信念体系の弱体化や諸価値体系間の相克による社会の統一性の衰退としての危機状況がパーソナリティーに及ぼすアノミー状態によってもたらされたものであることを指摘した。これらのことがらは、今までみてきた諸論点と必ずしも矛盾しない。すなわち、そこでは社会の外的構造と内的構造の崩

壞の事実の存在に共通の視点を置いてゐるからである。

そして、その克服の途として共同の価値体系や信念体系の獲得の必要性をとりあげたが、ここにおいても再び、その点を主張したいと思う。この状況に対しては今までいくつかの提案がなされた。たとえば、新しい中間集団すなわち、「顔の見える」中間集団としての文化的自発集団を創りそれらの多元的な集団の中で演じられるいくつかの役の背後でつねに鮮やかに醒めてゐる排優の心をもつ新しい個性を養ふことの必要性をとくもの。また、各個人がコンサマトリーな要求と手段合理的な必要との両者を意識し、その分裂に耐えうるだけの強さをもつことを要求するもの。さらには、これまでのアイデンティティー人間のようには、既成観念や物の考え方を準拠棒として明確に目標を立て、その目標に向つて努力していく有視界型の生き方に対する視界ゼロの生き方、つまり予測できないあらゆる可能性に順応しよううな心をもつこととするものなどである。

しかし、これら新しい中間集団への着眼やその他の主張にしても、それらはいずれも最後は人間のメンタルな面での心構えに視点を置いてゐる。いまかりに、このレベルで考えてみても、そこには、一つの問題がある。すなわち、それは自己のメンタルな、しかも、自己内閉的な志向性において外的状況へ適応し、それを処理しようとする姿勢である。けれどもそのような自己内閉的なメンタルな面の心構え、態度変更をとくのみで、この状況が克服されうるものであろうか。それからの脱却は、他者（この場合、個を内包するより大きい社会）との関連の視点を除外しては到底

考えることができないのではないか。すなわち、個への志向が、いかに強くともその強さを支えうるものは、逆説的に自己を超える共同の一貫性のある基本的な中核的価値、或は、集団への依拠がなければならぬと思われる。そのことはまた逆に、個人に自己充足性と同一性を与え、より個への志向に意味を与えるものとなる。また、それが裏打ちとなつてこそ多様性の追求も意味をもちうるものであろう。その共同の中核的価値こそが、或る状況においては、個人の欲求の無限拡大を抑制し、或る状況においては、個人の欲求を促進し、個と全体の平衡を保たせうるのではないであらうか。

註

- ① Daniel Bell, *The Coming of Post-Industrial Society*, 1973.
- ② 「分衆」の誕生・博報堂生活総合研究所編、日経新聞社、昭和二〇年。山崎正和・新しい個人主義の誕生。猪口邦子・中流とは消費のカテゴリリだったのか？差異化志向の拡大中流社会論〜中央公論、昭和六十年七月号。
- ③ 村上泰亮・産業社会の病理、中央公論社、昭和五十年。新中間大衆の時代、中央公論社、昭和五十九年。ゆるぎの中の衆社会、中央公論、昭和六十年五月号。
- ④ 西部邁・経済論理学序説、中央公論社、昭和五十八年。大衆への反逆、文芸春秋社、昭和五十八年。
- ⑤ 高橋憲昭・「天蓋」の再生、哲学論集 第三十号、大谷大学哲学会、昭和五十九年。